

＜株式会社エフエム東京 第 513 回放送番組審議会＞

1. 開催年月日：令和 6 年 11 月 12 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 11 階大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（6 名）

ロバート キャンベル 委員長	佐々木 俊尚 委員
松田 紀子 委員	山口 真由 委員
柴崎 友香 委員（リモート）	福里 真一 委員

◇欠席委員（0 名）

◇社側出席者（5 名）

唐島 夏生	代表取締役社長執行役員
内藤 博志	取締役執行役員編成制作局長
宮野 潤一	編成制作局次長 兼 編成部長
山領 由紀	編成制作局制作部長
延江 浩	編成制作局ゼネラルプロデューサー

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（45 分）
TOKYO FM 特別番組『追悼唐十郎！令和六年の少女仮面』
2024 年 10 月 6 日（日）26：00～28：00 放送

《議事内容》

議題 1:最近の活動について

■TOKYO FM リスナー感謝祭 in 渋谷音楽祭 2024 について

10月19日（土）、20日（日）の2日間、TFM 社員・制作スタッフと番組パーソナリティからリスナーへの感謝の気持ちをお伝えするイベントを渋谷で開催しました。

メイン会場の LINE CUBE SHIBUYA では、19日は当社でレギュラー番組を持つ人気グループ MAZZEL ら3組が出演するライブ、20日は人気番組「安部礼司」と、平日レギュラーワイド番組のパーソナリティ12人が出演した特別番組の公開生放送を実施。7月にオープンした話題の複合施設 Shibuya Sakura Stage 内のイベントスペースでは、「JA 全農 COUNTDOWN JAPAN」の公開生放送や AuDee 番組の公開収録を両日ともに行いました。

その他、オリジナルグッズの販売や、TFM タイムテーブルの表紙撮影体験会や、スタンプラリー等、リスナーが参加できるイベントもあり、昨年につき2度目となる感謝祭は大盛況のうちに終了。各会場では、当社社員が物販や会場案内、スポンサー提供のお土産配布等に携わり、社員全員が運営スタッフとなって、リスナーに感謝の気持ちを伝えました。



▲ワイド番組パーソナリティ大集合スペシャル



▲ワイド番組パーソナリティによるミート&グREET



▲フォトブースや会場装飾



『馬場・渡辺の#ピジトビ』

『JA全農 COUNTDOWN JAPAN』

『SCANDAL Catch up supported by 明治ブルガリアヨーグルト』



『新藤兼俊とこれからの時間 presented by 明治ブルガリアヨーグルト』

『GAME MUSIC DUNGEON supported by SQUARE ENIX MUSIC』

▲Shibuya Sakura Stage 各公開収録

議題 2 : 番組視聴

【番組名】

TOKYO FM 特別番組『追悼唐十郎！令和六年の少女仮面』

2024 年 10 月 6 日（日）26：00～28：00 放送

【番組概要】

本日ご試聴いただくのは、10月6日（木）に放送した TOKYO FM 特別番組『追悼唐十郎！令和六年の少女仮面』のダイジェストです。

この番組は、今年5月4日に逝去した劇作家・演出家の唐十郎氏の追悼番組。唐十郎氏の劇団「状況劇場」は、1960年代の新宿・花園神社内に「紅テント」をたて、テントの中で演劇をするという画期的“発明”をしました。その“発明”がどのように紡がれているのかを探るために丸4ヶ月の月日をかけて、唐十郎の世界に触れた当事者たちにインタビューした模様をお届けします。パーソナリティは、唐十郎氏の娘で俳優の大鶴美仁音が務め、探偵しながら唐十郎の足跡を辿りました。

今回インタビューした唐十郎の世界に触れた各界の当事者たち：

小林薫（俳優）、久保井研（劇団唐組座長代行）、金守珍（新宿梁山泊代表）、宮台真司（社会学者）、島田雅彦（作家）、宇川直宏（現在美術家）、新井高子（「唐十郎のせりふ」著者）、久保陽子（富山高等専門学校一般教養科准教授）、佐井大紀（TBS テレビプロデューサー）（順不同）

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側意見)

○素晴らしい追悼番組だった。今、こういうのはテレビでもあまりないので、ラジオとか、TOKYO FM がしっかりやっているんだなとすごく感心した。上っ面だけでないことが番組から伝わって来て、深いところまで行きたい、という思いが溢れていて、素晴らしかった。

○何ととってもインタビューの量。小林薫氏や文化人へのインタビューは想像がついたが、現在の赤テントのお客さんや昭和レトロ好きの若者、古本屋で「黒の手帳」を買った人、歌舞伎町に集まっている人にまで話を聞いて迫ろうというのがすごく面白いなと思った、

○数十回 CM を見るより、1 回の体験型に触れたほうが印象が強く、心に残るといふ話もある。今、デジタルの時代だからこそ、より生々しい体験に反応してもらえるのではと思いつながり聴いた。

○唐十郎という人物は割と猥雑な感じで、ごちゃ混ぜとか光と闇がキーワードかと思うが番組は知的的に整然と作られていたので、もう少し猥雑さのようなものが番組に入っても良かったのではと思う。

○もともと唐十郎の世界観が苦手ではあるが、唐十郎が苦手な 1 リスナーという立場から聴いた。色々な方のインタビューがしっかり録られていて、1 つ 1 つはとても興味深く聴いた。みんなが SNS とリアルの違いやアナログ回帰への憧れ、肉体のリアルを求める現代人の姿についてをずっと語っていて、結局それを求めることに唐十郎がどんなインパクトを与えたのか、ということを理解することができなかったというのが正直な感想。「汲み取り便所をずっと眺めていたい」という女性のインタビューを聴いて気持ち悪さを感じてしまったが、深夜帯なので問題ないのかもしれないが、他のリスナーがどう思ったのか、気になった。

○私は、番組内で古本を買ったりしていた人と近い感じで、若い時はレトロなものや 60 年代、70 年代のものに興味があった。そういうものに興味を持ちつつ、唐十郎の舞台は観に行ることがなかったが、映画や当日の世相を調べたり、唐十郎に影響を受けたものの話は様々なところから出てくるので、とても興味深く聴いた。これだけ興味があるのに何となく身構えてしまって観に行かなかった理由が、今回番組を聴いて分かったような気がした。

○小林薫氏が「テントから出るとそこは普通の街で、そのギャップにすごく驚いた」と言っていたが、それが番組全体を象徴していたように思う。番組後半にもテ

ントの内と外を行き来するような感覚だったり普段生活している世界と演劇の世界が入れ替わるような、混ざり合うような話があったが、それはドアなどでしっかり別れる空間ではなく、揺らぎがあったり、出入り出来たり隙間が見える、テントという形式で作られたことに大きな意味があったのではと思った。

○ラジオだと映像と違いテロップが出ないので、「今話しているこの人は誰だったのかな？」ということが結構あったが、だからこそ、肩書や外見から来る先入観がなく、人の話が聴けた、ラジオのすごくいい一面なのかなと思う。

○とてもいい番組だったと思う。聴き始めた最初は、古くから状況劇場を知っている年配の人たちのインタビューで構成されているが、後半になってくると歌舞伎町のトー横の話や映画監督など、現代の日本に繋がる人たちをちゃんと描いていくことによってまさに状況劇場とか唐十郎が 21 世紀の日本に何か意味を持つのか立体的に描いていて秀逸だと思った。

○単なる回顧やノスタルジーではなく、現代において歌舞伎町はいったい何を意味するのか、トー横みたいな現代のポリティカルコレクトネスには全くそぐわないような不思議な空間が存在していて、そこで平然と売春とかも行われている。もちろんそれはいけないことだが、同時にああいうグレイゾーン的なものがあまりにホワイトウォッシュ化された現在の日本で存在しなくなっているつまらなさを感じている人は結構多いと思う。

○歌舞伎町はすごく不思議なエリアで、誰もコントロールしていない。もともと台湾系の華僑が持っていた土地で、今はどうなっているのか分からないが、他の都市開発のように巨大資本ではなくて地場の人が使っている土地。そこに戦後ヤクザが入って来て、ヤクザも 1 つの組が一色に塗り潰すとかではなく、いろんな組が入り混じっている。そこにチャイニーズマフィアやタイのマフィアが入ってきたりとか、最近だとホストクラブができたりとか、ありとあらゆるものが混然一体となって存在して、誰もコントロールしていないところが面白さでもある。番組内でどなたかが、歌舞伎町は一種の避難所、法の外にある地帯という意味のことを言ったが、そういうものが今、日本から失われていて、こういうものを取り戻したいというある種の欲求があるのではないかと。

○番組の後半で、唐十郎は VR ではなく AR だっていう発言をしていた。完全にフィクションではなく、現実とフィクションを幕一枚で行き来できるような存在だったと。この番組はなかなか鋭い哲学をもっていて面白いと思った。1ついうなら、この辺りの話をもう少し前面に打ち出したらもっと全容を見渡せたのではと思った。いずれにしても非常に素晴らしい番組だった。

○私も唐十郎の世界観は苦手。ただ、なぜこの方がこれだけの人の心を動かし、評価されるのかはこのラジオを聴いてとてもよく分かった。

○お嬢さんのパーソナリティがすごく良かった。距離感が独特で、一般的な父親に対する感覚とは全く違った。役者をやっているからだと思うが、距離感があって、客観的に淡々と進んでいくのがいいと思ったのと、亡くなるときの描写から始まるのもすごく良かった。

■TOKYO FM が来年 55 周年を迎えるが、音が残っていることが番組制作のきっかけだった。追悼番組を作ることは難しい。ご指摘の通りいろいろ物議を醸すような部分もあったが、放送時間が深夜ということもあり、あえて問題を残したまま番組を作った部分もある。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「ドライバーズインフォ」

11月30日(土) 5:55~6:00 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>